

(電子メール施行)
農技1137号
令和元年6月12日

関係機関長 様

兵庫県病虫害防除所長

令和元年度病虫害発生予報第2号を發表します。

令和元年度病虫害発生予報 第2号

向こう1か月の病虫害発生予想

作物名	病虫害名	発生予想	発生現況
イネ	いもち病(葉いもち)	平年並	少
	ばか苗病	—	平年並
	ヒメトビウンカ(縞葉枯病)	やや多	やや多
ナシ	黒斑病	やや多	やや多
	黒星病	やや少	少
	ハダニ類	平年並	少
	アブラムシ類	平年並	平年並
野菜共通	シロイチモジヨトウ	やや多	平年並
果樹共通	果樹カメムシ類	多	多

* 気象の概況

近畿地方 1か月予報

(6月8日から7月7日までの天候見通し)

令和元年6月6日
大阪管区气象台 発表

<予想される向こう1か月の天候>

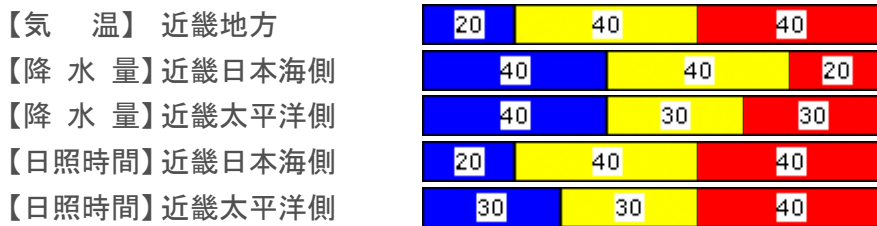
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。近畿太平洋側では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

<気温経過の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い ■ 平年並 ■ 高い

<予報の対象期間>

1か月 : 6月 8日(土) ~ 7月 7日(日)
1週目 : 6月 8日(土) ~ 6月 14日(金)
2週目 : 6月 15日(土) ~ 6月 21日(金)
3~4週目 : 6月 22日(土) ~ 7月 5日(金)

* 発生概況及び防除対策上の留意点

イネ

1 【いもち病】（葉いもち）

- (1) 予報の内容 発生量： 平年並
- (2) 予報の根拠

ア 5月下旬時点で県内における本病の発生は認めていないが、今後の1か月予報によると、気温は平年並または高く、特に太平洋側では平年と同様曇りや雨の日が多いと予想され、平年並の発生が予想される。

イ 6月上旬より梅雨明けまで、兵庫県立農林水産技術総合センターホームページ上でBLASTAMによるいもち病の感染好適日の情報を提供しているので参照にすること。

(<http://hyogo-nourinsuisangc.jp/chuo/bojo/index.htm>)

2 【ばか苗病】

- (1) 発生現況
発生量は平年並であるが、広域でその発生が認められている。

(2) 防除上の留意点

本病は種子伝染性病害であるため、今後、次のことに留意すること。

ア 自家採種は避け、種子更新は毎年必ず行うこと。

イ 自家採種した種籾と購入種子は同じ槽内での消毒・浸種を絶対に行わないこと。
購入種子が薬剤吹き付け種子であっても、混合した場合は消毒効果が低下する。

ウ 消毒・浸種を実施する場所は周辺の清掃に心がけ、伝染源となる稲わら・籾殻を除去すること。稲わら・籾殻が消毒・浸種槽に飛び込んで感染を起こす可能性が高い。

エ 採種ほ場の周辺で発病を認めた場合は直ちに除去すること。発病後枯死すると胞子を飛散させ、採種ほ場に伝染する。

なお、種子消毒の留意点については平成30年度病害虫発生予察防除情報 第6号（平成31年3月15日付け）を参考にすること（HPに掲載）。

3 【ヒメトビウンカ】（縞葉枯病）

- (1) 予報の内容 発生量： やや多
- (2) 予報の根拠

ア 5月下旬の県下一斉調査（ムギほ場におけるすくい取り）では、第1世代虫の密度が128頭/10回振と前年の37頭と比べて多かったものの、成虫はほとんど確認されておらず、成育はやや遅れている状況であった。

イ それに伴い、第1世代成虫の収穫期の早いムギからのイネ本田への飛び込みはある程度回避されると考えられるが、収穫期の遅いムギほ場からの飛び込みには注意が必要である。本種は縞葉枯病を媒介するため、ムギ周辺ほ場及び前年度に

本病が多発した地域では本年度も発生が懸念される。

ウ 前年秋の縞葉枯ウイルス保毒率（平成30年度病害虫発生予察技術情報第1号 <http://hyogo-nourinsuisangc.jp/chuo/bojo/index.htm>）は、播磨地域で保毒虫率が高い傾向が見られており、特にこれらの地域では本病の発生に注意すること。

(3) 防除上の留意点

ア 本田における初期発病株（葉色が薄くなり巻いて垂れ下がるゆうれい症状を現す）は、出穂期の感染源となるので、速やかに抜き取る。

イ 発病株が多数確認される場合は、後期感染を予防するため、ヒメトビウンカに対する本田防除を実施する。

ウ 防除に当たっての要点については「水稻、小麦二毛作地域における縞葉枯病防除マニュアル」を参考にすること（HPに掲載）。

エ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

ナシ

1 【黒斑病】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の場内調査及び現地調査では短果枝の発病葉率3.9%（平年値1.7%）、発生は場率66.7%（平年値41.7%）とやや多い傾向にある。

イ 今後1か月の気象予報によると、日本海側では降水量は平年並または少ないと予想されているが、今後、梅雨前線による降雨も見込まれることと気温が平年並または高いと予想されていることから、本病の発生はやや多いと予想される。

(4) 防除上の留意点

ア 農薬散布時は、薬液が十分かかるように不要な徒長枝を切り落とすこと。

イ 大袋かけ前は黒斑病の重点防除時期なので、ていねいに薬剤散布する。

ウ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、耐性菌管理の観点から農薬の選定にあたっては、同系統の薬剤の連用は避ける。

(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

2 【黒星病】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の場内調査では発生は確認されていない。日本海側では降水量は平年並または少ないと予想されているが、今後梅雨前線による降雨が見込まれることと気温の上昇に伴い、やや少ない発生が予想される。

3 【ハダニ類】

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬の場内調査では発生は確認されていない。
- イ 今後の1か月予報によると気温は高く予想されており、季節的にも本種の増殖に好適な条件になるため、平年並の発生が予想される。

4 【アブラムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬の場内調査では寄生葉率5.0%（平年値7.2%）、発生ほ場率33.3%（平年値36.7%）と平年並の発生であった。
- イ 今後の1か月予報によると気温は高く予想されているが、アブラムシ類の発生最盛時期が過ぎていることから、平年並の発生が予想される。

野菜共通

1 【シロイチモジヨトウ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

- ア 加西市では、フェロモントラップの4月から5月までの成虫誘殺数の合計が5.5頭で前年と同等であったが、誘殺開始は前年より半月早く4月4半旬であった。
- イ 今後の1か月予報によると気温は高く予想されており、季節的にも本種の増殖に好適な条件になるため、やや多い発生が予想される。

(3) 防除上の留意点

- ア 本種は茎葉の柔らかい部分を好んで食害する性質があり、定植直後の被害には特に注意すること。
- イ 薬剤散布を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

果樹共通

1 【果樹カメムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：多

(2) 予報の根拠

- ア チャバネアオカメムシ等果樹を加害するカメムシ類の発生量には隔年性があり、本年は裏年（発生が少ない年）に該当するが、加西市のフェロモントラップにおける4～5月の合計誘殺数は542頭と、裏年の過去5年平均値（41.9頭）より著しく多く、表年（発生の多い年）の過去5年平均値（337.5頭）を上回る状況である。また、朝来市の同時期の合計誘殺数は1108頭と、表年の過去3年平均値（102.5頭）を大幅に上回っている。
- イ 加西市の予察灯における4～5月の合計誘殺数は6頭で、裏年の過去5年平均値（0.7頭）より多い。また、朝来市の同時期の合計誘殺数は70頭と、裏年の過去5年平均値（0.8頭）はもとより、表年の過去5年平均値（6.1頭）を大

幅に上回っている。

ウ ナシ等で果実の吸汁被害が見られているところもあり、気温の上昇に伴いカメムシ類の活動がさかんとなるため、果実への加害が懸念される。

エ 果樹カメムシ類の詳細については、令和元年度病虫害発生予察注意報第1号（令和元年6月12日付け）を参考にすること（HPに掲載）。

(3) 防除上の留意点

ア 飛来状況は地域や園地で異なるため、園地の見回りを実施し、発生や被害を認めたら速やかに防除する。

イ 薬剤散布を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>